

『ソモト・エモーショナル・リコール&リリース』

関連資料（１１）

引用・出典

◆医者が治せなかった慢性病が劇的に治る

早瀬久義（著） １０１～１０４頁

その後、帰られてから一カ月後にお電話を頂きましたが、あれ以来、全く症状は出ていないということです。

それにしても、このヘルニアという疾患は、一般には神経根が圧迫されることによってシビレや痛みなどの症状を生み出すと考えられていますが、果してそうなのか、かなり疑問が残るところです。

不定愁訴

●——体全体の筋拘縮が原因

症状は、頭痛、めまい、肩こり、背腰部痛、倦怠感、体のあちこちの痛み、顔のほてり、手足の冷え等、実にさまざまな症状があります。そうして、こうした症状の一部を訴える方、全部の症状を訴える方、いろんな患者さんがいます。

原因は今のところ不明とされており、ただ、中年以降の女性によく見受けられるために更年期障害であるとか、男性であれば自律神経失調症と判断されることが多いようです。

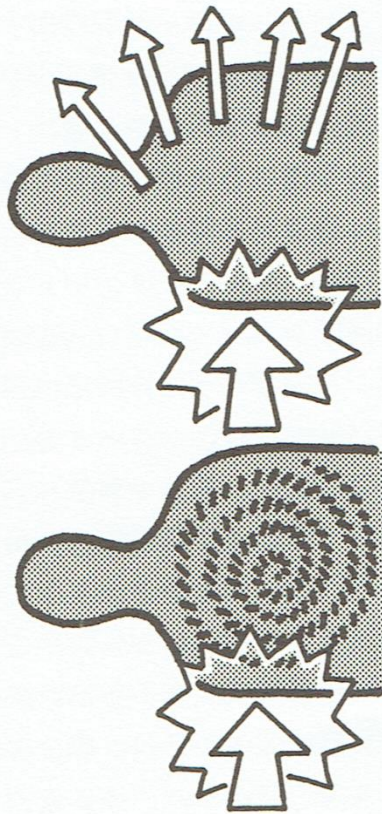
原因がないということはないはずなのですが、私がこういう患者さんを診ますと、体のいたるところに筋硬縮が見受けられます。

人間も中年を過ぎますと、筋肉に生理的短縮が起きてきますし、長年の生活環境、仕事の環境によって、無理な姿勢の継続や一定の筋肉への過度の負担、あるいは運動不足などが積もり積もってさまざまな障害を生み出してもおかしくないような状態になっています。そういう状態で、ちょっとしたはずみで首や腰をひねってしまうと、筋硬縮のためにいつも簡単に脊椎変位や硬膜変位を引き起こしてしまいます。そして、それが、さまざまな神経障害となって現れてくるのです。

不定愁訴を解放する特殊な治療法として、ソマト・エモーショナル・リコール&リリース（体性感覚の再念による解放）というテクニックがあります。このテクニックの開発者であるアプレジャー医師は、このテクニックの科学性や医学的根拠について、「推論ではあるが」と前置きした上で、次のような仮説を建てておられます。

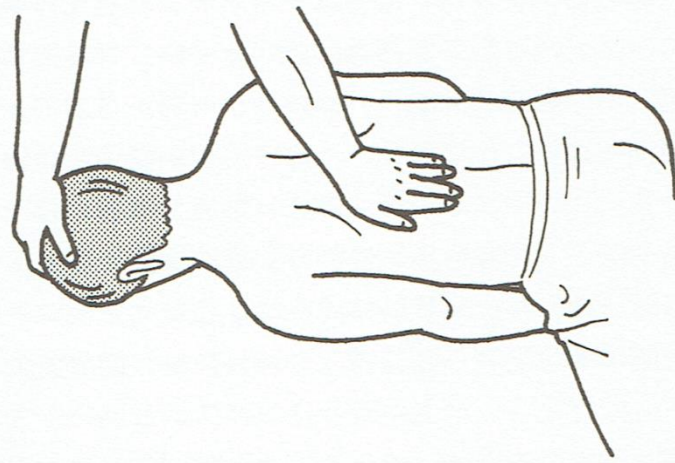
それは、肉体が外から衝撃を受けると、それが例えば交通事故にしろ、ラグビーなどのスポーツで倒れたにしろ、あるいは階段を踏み外したにしろ、肉体が受けたその損傷の大小は別として、衝撃のエネルギーが体内で渦巻くように滞留することがあるということです。そのほとんどの場合は、衝撃の大小にかかわらず、そのエネルギーは抜け去ってしまうのですが、時としてそのエネルギーが体内に滞留してしまい、それが後年、不定愁訴として顕れてくるという説です（一〇三ページ図参照）。

衝撃のエネルギーを体に受けた場合



衝撃のエネルギーが体の中で滞留してしまふと、後年、不定愁訴となつて表われる。

通常は衝撃を受けても、損傷の大小にかかわらず、エネルギーは放散されている。



ソマト・エモーションナル・リコール&リリースの治療法

確かに、私の臨床経験の中で、この学説に基づく治療方法で患者を解放に導いたことが一〇例ほどあります。

さて、その具体的なやり方ですが、次ページの図のように、まず患者を上半身裸で、ベッドの端に座させます。術者は患者の側方に立ち、片方の手を中指と薬指の間を開いてV字のようにして、脊柱の両側に軽く支えるように当てます。位置は背中の中程でいいでしょう。もう一方の手は、頭のてっぺん（厳密にいうと矢状、冠状縫合）を覆うようにやはり軽く手を当てます。

すると、エネルギーの停滞がある人は、ほんの二、三秒も経たないうち、後ろへ倒れてしまい、仮眠状態にはいります。本当に不思議なことです。どういうふうに科学的に説明したらいいいのか分かりません。

脇で見ていると、一種の催眠術のように思われるかもしれませんが、催眠術ではありません。

そして、倒れこんだ患者さんは、仮眠状態の中で、その衝撃を受けた時の状態の動作を再現するような行動をとることがあります。また、全身をけいれんさせる場合もあります。後で聞いてみると、確かに、衝撃を受けたときのことを仮眠状態の中で夢見心地に見ていたといえます。

私が治療したある四〇代半ばの男性は、事故で車ごと崖から転落して、ケガが治った後何年か経ってから不定愁訴に悩まされるようになったそうです。この方にこのテクニックを施してみると、仮眠状態で両手をグルグルと回す仕種をしておられました。目覚めたあとの話によると、崖からおちる時の夢をみていたとおっしゃいます。きっと、落ちる瞬間に、ハンドルから手を放してグルグルと回しておられたのでしょう。

さらに、しばらくして、今度はけいれんを起こされました。私は軽く片方の手を握ってあげていましたが、七、八秒でけいれんは収まり自然と目を覚まされました。そして「ああ、スッキリした」といって自分でベッドから起き上がりました。その後は、一度も症状は出ず、完全に不定愁訴から解放されたと喜んでおられました。

もし、このテクニックを健常者に施すとどうなるか。半分くらいのひとはやはり仮眠状態に入る人もいますが、半分くらいの人は何の変化もありません。健常者の場合も、同様に、全身の力を抜いてリラックスした状態で行いますが、二〇秒くらい経っても後ろに倒れないようでしたら、その人は何も起きません。エネルギーの滞溜している人は、ほんの二、三秒くらいでドスンと倒れますので、だれか助手の人に肩を支えるようにしてもらわないと、危ないので気をつけてください。

不定愁訴とされているものには他には、うつ病、不眠症などもあります。この中で不眠

症に関しては、全身拘縮になっていることが多く、この拘縮をとってやると、不眠症はほとんど治ります。その他、この頭蓋仙骨療法に対応できる疾患として、てんかん、睡眠発作、自閉症、老人性痴呆症、アトピー性皮膚炎の一部などがあります。

また、私の傘下の治療院の先生が、十二年間にわたって入院していた精神病患者を、病院から通院させながら治療し、回復させ、見事に社会復帰させた例もあります。

【症例①】病院・民間療法で駄目だった全身の痛みが完治

五〇歳の女性。ふらつき、頸部の不快感、腰痛、膝痛、そして体全体にわたって触られると痛いという症状。さらに、それらの症状に伴う躁鬱病が見られました。

この患者さんから電話を頂いたのは、北海道からでしたので、私はてっきり北海道在住の方かと思っていました。ところがよく聞いてみると、東京の方だということです。どういふことかという、目ばしい東京の病院、民間療法はだいたい回り尽くしたのですが、なかなかよくなり、その時に北海道にいい整体の先生がいるということをきいて、北海道に三カ月ほど滞在していたらしいのです。しかし、そこでももうひとつ芳しい結果が得られなかったということで、あるきっかけで知った私のところに即座に電話をかけてきたということです。